

# 史遊会通信

No.228号  
平成26年  
2月10日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井宏

一月講演 「文学・音楽等雑話」

—源氏物語と平家物語と井上靖およびワグナー—

小田 紘一郎

一、今日は、標題のような事で雑話をさせ  
ていただく。源氏物語(以下「源」)、平家物  
語(「平」)、ワグナーの諸作品(「W」)は、  
いずれも古典であって長い歴史を通り抜け、  
現在に到っている。井上靖の諸作(「井」)も  
一〇〇冊を越え、我々の興味を引くものが多  
くある。

それぞれを比較することにより、それぞれ  
の特徴、意味合い、限界等がわかると思われ

る。又、これらの時代的背景、主張、物語の  
筋を読むことは、歴史そのものをも理解する  
ことにも役立つ。

優れた文学、音楽等は、時代を読み、分析、  
評価し、次の時代をも予測するものである。  
何よりもこれら大作に接することに大きな意  
味がある。

様々な違いはあるが、結局のところ一言で  
表せば、人生と人間について考察し、書いて

例会のお知らせ

◎ 二月例会

日時 平成二十六年二月二十六日(水)

午後六時開場〜八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 鯨游海氏

テーマ 春蘭秋菊、俱に廃すべからず

三月号自由執筆 三戸岡道夫、隆恵、

小田紘一郎の諸氏 締切二月末

◎ 三月例会

日時 平成二十六年三月二十六日(水)

午後六時開場〜八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 隆恵氏

テーマ 未定

四月号自由執筆 千坂精一、中込勝則、

新井宏の諸氏 締切三月末

いることである。

二、「平」は、「源」と並ぶ日本古典文学の双壁であり、両者の大きな背景の違いは戦争の有無である。

「平」は、女性の登場人物も少なく恋愛描写も平凡である。戦争の時代に恋にふける等のことは出来ず、平安な時代に書かれた「源」の「もののあわれ」等の意識は芽生えてこないであろう。無常観が主流とならざるを得ない。(諸行無常の響きあり)、又、経済的な視点も欠如していると言われている。

何故、音楽としてベートーベンではなくワグナーかという事に一言触れておきたい。前者には、精神的愛や人類的愛があっても、情緒的、官能的な愛がないのではないか。又死についても語られることがなく生への執着が主である。そこにいくと後者の作品にはそれらが顕著に見られるし、何よりもストーリーがはつきり語られている。オペラ・楽劇は、文学と音楽と演劇の合体したものである。

### 三、愛について

(1) 「W」の音楽の世界の恋愛には、男女の愛

への強い陶醉、讃歌、又愛の二重奏が顕著に見られる。

「W」の代表作品である「トリスタンとイゾレテ」(T&I)は、特にこの事が見事に表現されているし、「ニーベルングの指環」(N)にも、双子の兄妹愛(ジークムントとジークリンド)、「ワルキューレ」やジークフリートとブリュンヒルデとの、どちらかと言えば、精神的な愛(「ジークフリート」)、「神のたそがれ」が強く描かれている。「ジークフリート牧歌」として知られているメロデーによって、二人は愛の二重唱、讃歌を歌う。これらに数々歌われている二重奏は、聴き応えがあり、ワグナー音楽の真髄である。前者(「ワルキューレ」)は、春の月のさしこむ中で、ムントが「冬の嵐は過ぎ去り、快い月となった」と歌うとリンデが「寒い冬の日にわたしが憧れていた春こそあなたです」と応える。バックでは、ムントのチェロ、リンデのクラリネットが両者の関係を引き立てる。この二人の間に生れた子供が、英雄ジークフリートである。後者は、長い眠りから、ジークフリート

により目覚めさせられたブリュンヒルデとの愛が長々と歌われる。又、(T&I)にも二人の男女の激しい愛が延々と語られる。「なお、降り来よ、愛の夜よ」は、古今の愛の二重奏の最大の傑作であると言われている。

(2) これに対し、「源」の場合、様々な愛は描いているが、ワグナーのような愛への陶醉が見られない。女はさめているし、男女の心のギャップが多く見られる。何故なのか

① 「W」の場合、男は女一人を愛するといふ一対一の関係が主体であるのに対し、「源」は、なかならず光源氏は、同時に何人も女性を愛するという一対二の関係であることである。男の愛は分散されるし、女性にとって男の愛を疑うであろう。唯一人、自分を愛してほしいと女が思うのは、いつの世でも当然である。

② 「源」において、主人公は権力者であり、富者であり、これらにまかせて、強引に恋を推進することがなきにしもあらずで、そのことが女性にとっては、どのように写ったであろうか。青年時代のはなやかな恋愛に対し、

中年時代の光源氏の恋は、女性(秋好中宮、玉鬘等)にことごとく拒否されている。

「源」の宇治十帖における恋は、三角関係である。大君の愛は、純粹であり、結婚を拒否する。

③ 時代背景の差(「源」は十一世紀、「W」は十九世紀)もあって、女性の権利、主権の強弱にもこのことは影響されていよう。

(3) よく読み聴いて見ると、両者に同じような男女関係が見出されるには興味を引く。

女一に対して男二の関係である。「W」の(T & I)におけるマルケ王—イゾルデ—トリスタン、指環においては、フンディングーリ—デームント、更にはジークフリート—ブルュンヒルデ—ダンカーと言った関係であり、「源」においては、桐壺帝—更衣—光源氏、朱雀帝—朧月夜—光源氏、光源氏—女三の宮—柏木、更には、薫—浮舟—匂宮と言った関係である。(真中にあるのが女性である)。

#### 四、死について

「源」も「W」も多くの死について語っている。「平」の場合もしかりで、「源」の場合

は病死が多いのに対し、病死、戦死、自害と多様である。「W」の場合も英雄(ジークフリート)の死を描いた「神々のたそがれ」の葬送

行進曲は莊大にして悲痛、かつ重々しく英雄の死を痛み惜しんでいる。これに対し、「源」の場合、主人公光源氏の死は、具体的に描かれていない。(巻名「雲隠」でも書かれていない)。何故なのか。ここに「源」を読みとく一

つの大きなカギが隠されていると思えるのであるが、様々な事が考えられるものの、光源氏(政治家)の死を作者は惜しむ気になれなかった、書くには価しないと考えたのではないか。若菜以降、晩年の光源氏についての描写の延長線上で考えると、あながち誤った見方ではないと思われるが、如何なものであろうか。

もう一つ決定的に異なる点は「W」の死は、愛と結びついていることである。死によって男女間の愛が完結するということである。日本では、渡辺淳一の「失樂園」において見られる。

(T & I)においては、トリスタンの死に

イゾルデが合体する。「W」音楽の「愛と死」として知られている美しい音楽である。又、「指環」においても、殺されたジークフリートの亡骸にブリュンヒルデが飛び込んでいく

等が該当し、「指環」をしめくくっている。これに対し「源」の場合は、男女がばらばらに死んでいって合一された死がない。愛と死がむすびついていないのである。このことは何を意味しているのだろうか。

#### 五、権力と人間について

「源」は、極めて政治色の強い物語である。「W」における指環の主要テーマは、権力(政治、経済「富」)は、人間をダメにするという考えであり、最後に、神々のたそがれを描き神の支配する時代の終焉と人間(愛)による世界の支配を高らかに歌ったものである。愛とは何か。

資本主義の進化により、その矛盾が深まり、資本家対労働者の対立が背景にあると言えよう。

今、「源」の冒頭にある桐壺の巻を読み返して、単なる帝と更衣の純愛の裏に、この権力

と人間の問題がはっきりと意識され描写されている。「W」より八〇〇年前に、それがあつたということは驚きでもあり、深い感動を憶えるのである。

帝と更衣は、純粹な愛により、帝と弘徽殿女御(第一夫人)は権力に結びついた愛だといえるであろう。そして、ここでは帝、更衣の愛が権力に打ち勝つということを示しつつ、更衣の死は愛が権力に負けたという側面をも併せ持っているであろう。

この権力と人間の問題は現在の政治、経済、社会状況にも受け継がれ、又、我々自身の問題としてもあるのである。出世をとるか、自分の気ままに趣味の世界に生きるかは、サラリーマン時代に誰もが強く悩んだ問題でもある。

光源氏自身の生涯におけるこの二面性が、「源」の物語の中でどのように描かれているか、それが愛(恋愛)と、どのような関係があるかと言う視点から読んでいくことは、極めて大切な事のように思われる。

「井」の場合、恋愛純粹培養的要素が大き

く、又、なにか世俗を超えて生きる主人公が多く登場するが、そのことが「井」文学の大きな魅力となっているように思える。

「源」の宇治十帖の世界は、政治の中心である京都から舞台を宇治に移し、政治的影響を極力排除して、純粹な男と女の愛を描こうとしたのではないか。しかし、男と女の齟齬のみが残った。

## 六、その他

(1) 「源」には基本的に悪は存在しない。(弘徽殿太后ぐらいか)。「W」には悪人が多くいる。アルベリツヒ、ダンカー、ハーゲン等、いや神(権力)の支配する世界こそ悪なのである。「平」は平清盛か。しかし、清盛も摂関政治を倒そうとした社会改革施行や国際化(貿易)の推進等評価される点があることも指摘されている。

(2) 旅について、「源」も「平」も「W」「井」も語っている。旅は古来から人生にたとえられている。光源氏の名文で名高い須磨は、将来の立身出世につながる旅であった。「W」の「ジークフリートのラインの旅」は、死への

門出であり、美しいメロディで語られている。

「平」の重衡の東下りは、頼朝に接見する旅、やがて死に到る旅である。「都をいでて、日数ふれば、弥生も中ば過ぎ、春も既に暮れなんとす……」。名文であり、太平記の「落花の雪にふみまよう、片野の春の桜狩り……」(海道下り)に引継がれていく。これもおとらず名文であり、これらを暗唱し、時として口づさんでいる。古典に接する楽しみである。「源」にも数多くの名文がある。

## (3) 母への思慕

光源氏の母更衣は、彼が三歳の時に亡くなった。その美しい母への思いが、光源氏の恋愛の原点である。母の面影を求めて藤壺(帝の妻)に恋をし、不義密通を犯し子供をもうける。(冷泉帝)。又、藤壺に満たされないものを多くの女性に求める。紫の上は、藤壺のゆかりである。(女三の宮も)「W」のジークフリートも母(ジークリンデ)が亡くなり、他人(ミーナ)に育てられる。演奏会の二夜に演奏される「ジークフリート」において、静かな森のささやきを聞き、小鳥達と話しつつ母のことを

想う。それが、やがてブルンヒルデへの愛となり、夫婦となる。これらの場合の音楽は、美しくロマンに満ちていて、何回聴いても飽きないワグナー音楽の魅力である。

(4) 父と娘

「W」においては、父(ヴォータン)神に反抗した娘(ブリュンヒルデ)が、罰として永遠のねむりにつかされるのであるが、この場合の音楽も素晴らしい。「源」において、父親は、娘に入内して天皇の子供を生むことを望んだ。一門の繁栄の為である。明石の君も空蟬や夕顔等中流女性のみならず大臣級のいわゆる上流階級の娘達(葵の上、六条御息所、朧月夜等)もそうであった。

(5) 夫婦 これも多く出てくる。「W」は、

ヴォータンとフリツカ、および、エルダ(ブリュンヒルデはその子)および人間の女(ムントとリンデを生む)。妻としての女性は強くしげしば夫を服従させる。神も妻に従わざるを得ない。

「源」は通俗的によく恋愛小説だと言われているが、夫婦小説として読むとな面白い。

光源氏は、何人もの妻を持った。女性達の心はどうであったろうか。なかならず正妻格の紫の上は、「氷とし石間の水……」(朝顔の巻)や多くの歌にその心を託している。

(3) (5)等を通じ、いずれも人間造型に優れている。「源」は女性を「平」は男性の造型に主体がある。

(6) 「源」の女主人公は紫の上、「W」はブリュンヒルデであろう。共に女として成長していくが、終年、紫の上は自己の人生をむなしかつたものだと自己反省で終るのに対し、ブリュンヒルデは火の中に飛び込んでいき、ワルハラ城(権威の象徴)を焼やしてしまうという社会改革的な側面があるのは、大きな違いである。光源氏は「W」の誰なのか。

(7) 救済について「源」は女性の場合、出家(特に浮舟)による。男の救済は何によるのか。

「W」の場合、男は女性の愛(永遠に女性的なもの)によって救われる。最後の作品「バルジファル」は、どうしてどうして、解釈が難しいものであり、この救済の問題を書いているように思えるが、現在の私は理解出来てい

ない。今後ワグナー音楽を聴くたのしみであり課題である。

以上、長々と様々な面を書いてきたが、正しいかどうか分からない。これからもこれらの古典から様々な事がわかり、学ぶであろう。

「源」の作者、紫式部は結婚生活三年にして未亡人、宮廷に女房としてつかえ、様々の人生、男の世界を見てきた。

「W」の作者も、結婚、離婚、三角関係等様々の経験をした。両作者のこれらの経験が、皆、作品にまつている。

結局のところ、文学も音楽も人生と人間について深い洞察がなされているのであるものであり、すべてのもの(権力、人間の生、愛)は、永遠のものではなく、終局的には滅びてしまふことを語っているように思えるのである。(26.1.15)

文学・音楽等雑話メモ

項目	源氏物語	平家物語	井上靖作品	ワーグナー作品
共通事項	①人生と人間 ②人間造形 ③全てのものは滅びてしまう ④男と女の関係 ⑤その他			
違う点	(価値・生き方) (源氏・女、平家・男) (権力・生・愛) (調和とずれ) (母への思い、恋愛)			
作者	紫式部(女)	信濃前司行長(男)	井上靖(男)	ワーグナー(男)
時期	平安時代1000年頃	鎌倉時代1200年頃	昭和 1960年～	1960～頃 生れて200年
事実	100年前 延喜・天歴の御代 (醍醐・村上天皇)	1177～1186年 治承元年～文治2年 (平家の全盛～滅亡)		オペラ、楽劇 物語と音楽と演劇の合体 <主な作品> 神話、伝説(中世)
期間	75年、4代の帝	9年	各冊により異なる:40年位	①リエンシェ
主題	ものあわれ (本居宣長)	諸行無常	恋愛、歴史、自伝 随筆	②さまよえるオランダ人
登場人物	500人前後	1000人以上	各小説:数人 老年文学に優れる	③タンホイザー ④ローエングリン
階級	皇族、貴族	貴族と武士、(天皇)	中間層、管理者	⑤トリスタンとイゾルデ(T&I)
時代背景	戦争なし:平安な時代	戦争や災害	戦後、平和経済的繁栄	⑥ニュルンベルグの マイスタージンガー
ボリューム	54帖(雲隠を入ると55帖)	12巻	100冊以上	⑦ニーベルングの指環
大きな流れ	光源氏の興隆と滅び 外より内へ、対照	平家の滅亡	人間(男女)の結びつき	完成に30年位かかる ラインの黄年、ワルクレー ジークフリート、神々のたそがれ
対立	(生と死) 皇族対貴族 男と女、夫婦	(生と死)病氣・戦死・自害 源氏と平家 清盛と後白河法皇	(生と死) あまりない(階級対立) 男と女、夫婦	⑧パルジファル ライトモチーフ(示導動機)の 積極的活用と無限旋律
自然	日本の四季	戦地	各地を背景	森、川、海、季節感少ない
消費者 (読者層)	貴族、女房、(天皇)	民、一般大衆	大衆(アッパーミドル)	バイロイトの祝宴(毎年)他
読み方	複写、語り (書き写し)	語り(琵琶)	週刊誌、新聞、単行本	
恋愛 (夫婦愛)	様々な恋愛 (青年期・中年期・晩年期) (光源氏と藤壺の密事) 三角関係(1対2) 男と女のすれ違う心 女性が不完全燃焼	あまり出てこない	純粋恋愛培養  (宇治十帖に似ている)  純粋愛、中年愛	官能的、情緒的(T&I)  精神的、落ち着いた(T)(N)  愛への陶醉、愛の二重唱 愛と死の一致
政治的	政治小説でもある 親天皇、摂関政治の否定	源氏体制の下での物語 (平家への対抗)	ノンポリ	権力(富)が人間をダメに する(指環)
経済的	根底にある格差問題 貧乏と女性(中の品)	経済的な根拠が ほとんどない	経済的に豊か	あまりない、空想的
権力	権力と人間	清盛の権力	権力等を越えて生きる	反権力的→英雄
死	多くの死が描かれているが、 光源氏の死が描かれていない	〃 戦死、病死、自害	氷壁等の死、娘の死	男と女の合一による死 英雄(ジークフリート)の死
愛と死 女性の 生き方	男と女、別々に死 女の成長(個人的) 紫の上(苦悩の克服)	ほとんどない	老人と死の思い 若い女性、人妻	愛は死により完結 (ジークフリートとフリュンヒルデ) (社会改革)フリュンヒルデ (神々のたそがれ)
時間、長さ	60時間位	30～40時間	100冊の文庫本	N・15時間、全部・40時間
文章等	長・中・短、和漢	七五調、漢	美しい文章	壮大きとロマン的
その他	和歌795首	和歌70首前後	詩	後期ロマン派
人間の救済	出家、多くの女性が出家 出家しない女性もいる	死	趣味、脱組織	女性の愛による救済 キリスト教による救済

自由執筆

佐倉藩 柏倉陣屋

平山善之

N君、ご無沙汰しました。お元気ですか。今日はまた、私の郷里、佐倉の話です。

私が佐倉商工会議所にいた平成十五年一月、元佐倉市長堀田正久氏が亡くなりました。旧佐倉藩主堀田家の当主で四期にわたり市長を務めた方ですから、市民葬ともいべき盛大な葬儀で私も会議所から何人か引き連れて裏方を勤めました。此の時、山形県から三〇人ほどの人が団体で会葬されたのをみて、「どういふ縁なのかな」と思ったものです。

明治四年、廃藩置県が実施されたとき佐倉藩は山形に飛び地四万石を持っていました。山形城主堀田正亮は延享二年（一七四五）十一月、老中に任ぜられ、翌年一月、前任老中の佐倉城主松平乗邑と入れ替わりに佐倉城主となります。宗吾事件の正信以来八十七年ぶりに戻ってきたわけです。（以後維新まで後期堀田氏として五代続きます。）

正亮の移封の際に、出羽国村山郡四五カ村が飛び地として佐倉藩領とされました。江戸時代、山形という土地は左遷の地の傾向があり、領主

の変遷は多かったそうです。また村山郡内諸村は諸大名の石高調整の場に使われたようです。一時また幕領になったりしますが、堀田正睦が老中に任じられた時、復活しました。佐倉藩は領内統治のため、柏倉村に陣屋を置き約七十名ほどの家来やその家族を常駐させていました。

藩校・成徳書院の分校も陣屋内に設置し、領民の入学を許し勉学を奨励したと言われます。

正久氏の葬儀に現れた山形県民は、この百五十年も前の旧領民の子孫でした。それにしても大名と領民という繋がりが切れてから百五十年も経つのに、しかも雪深い出羽と下総と離れた土地で、この結びつきがあるのは何故だろうか、不思議に思いました。一度、山形へ出掛け行って、その辺を探ってみたいと思いました。が、つい機会を得ず十年近く経ってしまいました。しかし、昨年、「えみし学会」のゼミが米沢で開かれた折、足を延ばして柏倉（今は山形市）へ行ってきました。

山形市柏倉は好い所です。市の中心から西南に六kmほど、路線バスで約二十分、東や南は広々と田畑が広がり、西は徐々に高まって朝日岳に列なる農村地帯です。さくらんぼなどの果樹栽培も盛んなようです。陣屋あといまは民

家や農地でそれらしき跡は何もありません。小字を「館」というのは名残でしょうか。南北百余間、東西六十余間の長方形で周囲を石垣で囲ったみ、東面に堀があり渡ったところが表門といった造りでした。約四十棟の建物があったようですが其の内一棟だけ今に残っています。東向き斜面の、小高いところに祠があります。この祠が陣屋時代の建物だということです。見ると、「堀田永久稻荷神社」と石柱に記されています。そこが陣屋のおよそ真中であつたそうです。

近くの農家で聞いてみました。「そうだ。佐倉の堀田さんの稻荷様だが、何で永久とついているかは知らん。年一回くらい、この神社のお祭りのときには佐倉から来るようだ。」

廃藩置県以後も、旧領主はこの神社によって住民との絆を保っていたわけです。藩校を住民にも解放していた先進性も評価されていたのでしよう。

葬儀のあと、葬儀委員一同に、堀田家から桐箱に入った家紋入り袱紗を下され、大名家は違つたものだと感じたものです。

向寒の候、ご自愛下さい。 敬具

自由執筆

四字熟語は世界一短い詩ではないか

……四字熟語が面白い(3)……

鯨 游 海

四字熟語は小気味よく幽玄で、ときに俳句より詩的でさえあると思う。「天涯孤独」には無限の寂寥を、「千紫万紅」には爛漫の春を髣髴する。要は想像力、創造力の問題だ。

しかも著作権に縛られない。昔誰かが創作したものが歴史の風雪に堪え人類の遺産となった。また殆どが中国古典に由来する由緒ある出自だ。これを正しく読み書き出来るだろうか。また正確な原義を理解しているだろうか。左記の二〇句で自問自答してみよう。

- ① 天外孤独 || 天外は誤りで天涯。天の外より更に外側の最果ての場所。無限の寂寥を感じないか。天外は無限大、孤独は無限小の対句。
- ② 軽重浮薄 || 重は間違いで佻。佻とは④軽い②薄い。つまり軽佻とは軽薄に等しい。
- ③ 一罰百回 || 回ではなく戒。一を罰して百を戒めるのである。百回に一回の罰ではない。
- ④ 一獲千金 || 獲ではなく攫が正解。攫とは①手で掴む②捕える③さらう。獲は得ることな

ので同じカクでも微妙に異なる。カクが違う。

⑤ 衆人看視 || 看視ではなく環視。皆が環になって視つめている状態。正解の人は優秀賞だ。

⑥ 疑心暗氣 || 暗氣ではなく暗鬼。神経症の人は暗闇を見ていると幽霊 || 鬼が居ると疑う。

⑦ 不俱帯天 || 帯ではなく戴。単なるライバルではない絶対に生かしておけない天敵をいう。

⑧ 隔靴搔痒 || 搔ではなく搔が正しい。搔とは①爪でひっかく②こする。痒い所を爪で搔くことだが靴の上からでは効果が無いのである。

⑨ 直情径行 || 径ではなく、径。径は直と同義。

⑩ 揣摩憶測 || 魔ではなく摩が正しい。揣も摩も①さする②なでる、転じて③推量する。こ

こは④の意味で、あてずっぽうに推量する。

⑪ 電光石花 || 石花でなく石火。電光は稲妻、火は火打石の火花で、あつという一瞬の時間。

⑫ 恐天動地 || 恐天ではなく驚天。天も驚く異常な出来事をいう。地が動くとは大地震だ。

⑬ 無為徒飾 || 徒飾ではなく徒食。徒に飾るのではなく唯ひたすら喰う、何もせずただ喰う。

⑭ 粗製乱造 || 乱は誤りで濫が正解。濫とは①でたらめに②みだりに等。どうも近年、濫の字が敬遠され乱が横行している風潮は問題だ。

⑮ 神面獸心 || 神ではなく人。表面は神さまのように見えるが実は邪悪な心を持つ人のこと。

⑯ 明鏡紫水 || 紫ではなく止。山紫水明の連想から紫と思いがちだが違う。曇りのない鏡と静止した澄んだ水。邪念のない坐禅の心境。

⑰ 因循古息 || 古は間違いで姑。姑とは少時で息は息をつくこと。少時の間、息をつくことで一時しのぎの守旧派を指す。因循は古いしきたりに従っているだけで改めないこと。

⑱ 四書五教 || 教ではなく經。四書とは論語、孟子、大学、中庸。五經とは詩經、書經、易

經、礼記、春秋の各書物。何れも儒教の教典。

⑲ 人心収乱 || 乱ではなく攪。攪とはまとめること。人心を掴み人望を得た人が眞のリーダーとなれる。近年各界ともリーダー不在だ。

⑳ 切糸扼腕 || 切糸ではなく切歯が正解。切歯とは歯ぎしりすることで糸を歯で切るのではない。扼とは握ること。一方の手で他の腕を握り悔しがるさまである。これ正解の人は

国語力がかなり優秀だ。

以上、四字熟語が詩といえるか否かはとも

かく、殆どが由緒正しい古典の語に由来する。

それ故濫や攪また瀾はやはり乱と一緒にしてはいけないのだ。国語力が乱れる基となる。



## 自由執筆

## 森浩一先生の追悼講演会に参加して

漆原直子

昨年末、古代史文化フォーラムの主幸で、森浩一先生の偲ぶ会・追悼講演会が行われた。午前中がご遺族を交えての「偲ぶ会」、午後は森浩一先生が提唱されてきた『地域学』・『町人学者』をメインテーマとし、サブテーマに「隼人と熊襲、そして蝦夷」とした四人の講師による講演があった。私は午後部の講演会に参加した。

私は、森先生のご著書を愛読している。先生の反骨精神と体制に迎合しない考古学の道を歩まれてきたことを尊敬している。人工透析を受けていると言うお話を伺ってからは、東京でのご講演はこれが最後かとも思いますが、参加し、数年が過ぎていた。特に『地域学』は、中央史史観を打破するものとして、その発展を期待してきた。私は関東に住む者なので、森先生が故網野善彦氏と提唱された『関東学』にずっと関心を持っていた。今回の追悼講演会では、『関東学』に触れたお話しは無かったが、ヤマト政権にまつろわぬ南と北の人々、先住民に関するお話を聞くことができた。

もう一つのメインテーマである『町人学者』については、主催者の方の説明によると、森先生が定義されている「自分の意思と甲斐性で研究をする人」で、四人の講師の方々はその実践している方々ということになる。森先生は、国家による研究機関のあり方には批判的で、税金で雇った人を大勢集めておくのは、権威におぼれ、研究がおろそかになると、警鐘を発していたそうである。

その四人の講師のうちのお一人が、当史遊会の会員でもあられ、えみし学会の会長でもある柴田弘武先生で、「蝦夷とは」を講演された。お話の概略は次のようである。

えみし学会は町人学者的であること、「えみし」は敗者として捉えることができ、まさに森先生の示す道を歩もうとしている。「蝦夷」と言われた人々は、縄文文化を受けつぎ、アイヌへその文化を伝達して行った人々であるとする。また、大和にも蝦夷の足跡は残されており、それは『古事記』や『日本書紀』に書かれている。例えば、宇陀の首領のエウカシ・オトウカシ、三輪山周辺にいたと思われる蝦夷の首領綾粕、などがある。また、人名・地名に残るアイヌ語由来の言葉、例えば先述のエウカシ・オトウカシは、兄ウカシ・弟ウカシで、「ウカシ」は、アイヌ語で翁を意味する「エカシ」に音が近いという。また、

「吉野」という地名は、国栖が住む地帯であるが、古音は「エシヌ」で、アイヌ語の「イ・アシヌ(獲物・十分豊かな)」から由来しているという。さらに、吉野には「象山(キサヤマ)」、象山(キサ)の小川」という地名があるが、この「キサ」という言葉は、アイヌ語で「耳」のことを「キサリ」ということに由来するという。「耳」のような形の地形を「象(キサ)」と呼ぶ。秋田県の「象潟(キサカタ)」や千葉県「木更津(キサラヅ)」も同様である。「エミシ」という語源も、アイヌ語の「イ・ミチュ(美衣の・吾)」であるとする。また蝦夷は畿内周辺にも住み、蝦夷の首領綾粕(アヤカス)は、大和王権により辺境を荒らす者として滅ぼされそうになった時に、泊瀬川で斎戒沐浴し、三輪山に向かって子々孫々の忠誠を誓ったという。なぜ三輪山に対して誓ったのか？それはその三輪山が蝦夷の聖地であり、蝦夷の祀る神が、大三輪神(オオクニヌシ)神であったからであるという。その三輪山の「ミワ」も、アイヌ語で解くと、「モ・イワ」小さな聖山」が、音韻変化したものだという見解もあるそうである。

以上人名や地名に残された言語が、アイヌ語で解くと、その言葉のもつ意味が理解できるし、蝦夷とされた人々は縄文文化を受けついで先住者であったことは確かなのである。

「熊襲・隼人」については、古代史懇話会の代表の方が「隼人とは」という題で、九州の歴史と文化を楽しむ会会長の方が「森浩一先生と熊襲と隼人」という題で、森先生の熊襲・隼人観を紹介された。「熊襲・隼人」も蝦夷と境遇が良く似ており、しばしば大和政権に対し反乱を起している。いずれも、ヤマト政権からは、征服・支配の対象とされてきた。森先生によると、九州は前漢・後漢や呉の国との関係が深い。また、熊襲(クマソ)というのは、「熊」と「襲(曾)」という二つの集団の複合体で、「熊(クマ)」は魏志倭人伝に出てくる狗奴国の人々がその前身であり、「襲(曾)」は後に「隼人」になったのではないかと。また、大和政権は熊襲に対して、肥後国に対クマソ政策として俘囚としての蝦夷を約千人配置していたという記録が『延喜式』に残されている。等々、大変興味深いお話であったが、ここではその一端の紹介で終わらせて頂く。その他、邪馬台国吉備説のお話もあったが、私にはよく理解できなかった。

いずれにせよ、森先生の残された功績、影響は大きい。これからも、その功績が生かされることを願うだけである。

二月講演要旨  
「春蘭秋菊、俱に廃すべからず」

鯨 游海

平成二四年末、総選挙で敗れた野田佳彦氏に替って登場した海江田万里氏は、記者クラブでの民主党総裁就任会見で自作の漢詩を発表した。

翌年々初、この詩に関し二つの評論が公になった。一は漢学者、他は文化人のもので論点は真つ向から対立した。

両論は一步も譲らぬ激しいものであったが、私の結論は「春蘭と秋菊、俱にとも廃すべからず」に落着いたのである。

### 事務局便り

去る一月二十二日の例会日、講演に先立って定例総会が行われました。

(正会員出席十四名)

- 1、二十五年度活動報告、収支決算報告並びに二十六年計画が承認されました。
- 2、例会会場はこの日初めて日比谷図書文

化館を使用しましたが、今後ともこの会場を使うことが承認されました。

3、二十六年から正会員の会費は半期七千円、年間老萬四千円に変更することが可決されました。

4、従来事務局(下山田宅)に保管されていた「史遊会通信」合本(創刊号から一〇号各一〇冊)については、友の会会員も含めて全員から欲しい人を募り、余部は廃棄処分とすることが承認されました。希望者は村上幹事まで連絡のこと。

#### 5 幹事について

鯨、平山両幹事がそれぞれ2年、4年と在任したので、交替を提案しましたが引き受け手なく、重任となりました。

鯨 游海 (総括)

村上邦治 (会計)

平山善之 (庶務)

今年度も右3名が幹事を勤めます。

なお、専任事務局を失い、幹事は事務局の負担を伴うこともあり、幹事の任期や選出法等につき明文化する方向で検討することが承認されました。

(現幹事でルールを立案し、近々改めて審議をお願いします。)